

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 春日川周辺の史跡を訪ねる

講 師 山下達雄

(高松市玉藻文化の会会長)

平成20年11月23日(日)

共 催 高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会

1 川添地名の由来と現況

高松市東部の旧村名で、旧山田郡の元山村、山崎村、下田井村の三カ村が明治二十三年（1890年）の「町村制」発布とともに川添村と称した。それから九年後の明治三十二年（1899年）郡廃合の結果、木田郡になった。さらに五十七年後の昭和三十一年（1956年）の高松市第五次合併に際して高松市に編入合併し、旧元山村が元山町、山崎村が東山崎町、下田井村が下田井町に町区画された。

その面積四・五一平方キロメートルである。村名の由来は、この地区内を春日川と新川が北流し、その両河川に添った地域ということで川添と呼ばれるようになった。地形的には、新川の東北に石清水神社や、明治維新の神仏分離政策によって廃寺となった久米寺跡、高松茶臼山古墳など旧跡の多い地域である。

その他は概ね平坦な地形である。また近年琴電長尾線の一部高架化や高速道路の開通、さらには高松長尾大内線バイパスの完成など、高松中心部との交通や高松中央ICから県外への往来が至便になった。そして、都市計画の線引廃止も加わって、今や川添地区は郊外園地帯から良好な住宅地、また大型商業地区としての色彩を強めている。

2 梶原芭臣旧宅跡

俳諧に通じ、県議・川添村長を務める

梶原家の屋敷は、川添村水田の今は東山崎町五十番台一帯にあった。

俳号を喜次郎芭臣と号し、名を梶原景年という。家業は売薬を営み屋号を「亀屋」といった。

亀屋膏藥こうやくといって貝殻に薬を入れて口を色紙で封をした軟膏は遠く紀州まで名を知られた。眼薬、胃腸薬、はれもの薬などは「亀屋の貝殻くすり」としてよく売れ財を成したという。父祖三代に渡って俳諧をよくし、幼少の頃から父に俳句を学び景年もまた俳諧に長じ俳号を甲子童、二観堂、雪月蘆とも号した。

大正元年（1912年）に南無庵七世を継ぎ、俳誌「俳湖」（木版刷り 和紙）を初版した。昭和元年（1989）南無庵を門弟に譲り、自ら「屋島荘」と号して俳道に精進した。

明治三十六年（1903年）から二期香川県議会議員を務めた。のち大正九年（1920年）六月から大正十三年（1924年）六月まで川添村長を務めた。大正十三年（1924年）還暦を機にすべての公職を辞した。没六十四才。氏の門弟たちが没後その功績を讃えるため、屋島山上の屋島寺境内に、龍が玉を喰わえた御影石の句碑を建てた。石の球面には師の次の句が刻まれている。

3 弘法の泉

讃岐国 山田郡 山崎郷 八反地 旧長尾街道北沿いに「弘法さんの出水」と呼んで、

今も地域の人々が大切に保存している泉である。弘法大師（空海）がまだ若い頃、屋島へ向かう途中この地の庵に立ち寄って休憩をとった。その尼が「この地は水が乏しくて思うようなお接待もできませんが」といって一椀の茶を差し出した。大師は茶をいただいで立ち上がり、その付近を歩いて錫杖しやくじょうでトントんと突いて「ここを掘りなされ」と言って里人たちと一緒に土を掘り返したところ、不思議にも昏々と清水が吐き出した。里人たちは



屋島寺門前の梶原芭臣の句碑

松に月

古き景色に

時雨けり

芭臣

大喜びして掘り起こした周りを竹で囲んで大切に飲み水として使用した。その後、この地方で疫病が流行したとき、この泉の水を飲んだところ たちま 忽ちにして病は退散した。里人たちは今更ながら大師の徳を偲んで傍らに祠を建てて朝夕礼拝した。今もこの出水には鯉が群れをなして泳ぎ回り、村人たちは弘法の出水と呼んで大切に保存し利用している。

八反地出水の由来（弘法の泉）

当所は弘仁元年弘法大師空海たりし頃久米寺参拝のみぎり当所の庵（釈門）に立ち寄り休憩なされたとき庵主の申すに此の地は水が乏しく思うようなご接待も出来ません。と申すと此の時大師は立ち上がりその近辺を歩き持って居たる錫杖にて、トントンと突いて 此の処を掘りなされ と言われ、村人と共に其の場所を掘ると忽ち其の所より昏々と清水が湧き出たを見て、今更の如く里人は驚き大師の尊さを感じる。村人集まり来たりて早速此の処に竹杭を打ち込んで囲んだと言われ、誰言うともなく弘法の泉と言われ、多くの茶人が好んで霊泉を所望したと申す。

撰文 下田井町 当所水神さんの御祭神は岡冢女神 みつはめのかみ 小比賀 唯一
八反地自治会



弘法さんの出水と祠

4 金毘羅燈籠

旧長尾街道を照らす大燈籠

八反地四百四十二番地の旧長尾街道南側沿いにある金毘羅燈籠は、万延年間に建立をと読める文字が刻まれているが、風化し読み取れない。今から百五十年昔の江戸時代末期に建てられたことがわかる。

この時代は庶民の間でこんぴら信仰が流行した時代で、通行手形をもらって他国のお伊勢さん参りやこんぴらさん参り、京都の伏見稲荷参りは庶民の唯一の楽しみであった。

讃岐の金毘羅道五街道の一つである長尾街道は遠く阿波の国や畿内から来る歩き遍路で賑わったものである。

八反地の金毘羅燈籠は五街道の中でも丸亀港福島の太助燈籠の次に二番目に大きな燈籠として当時有名であった。この燈籠の上端部分の宝珠は御神酒徳利の形をしている。これは宇宙に神酒を奉る酒器をかたどる。先端には穴が開いている。即ち宇宙の神々に諸々の厄を祓う祈りを込めたもので鬼門の方角向いているという。また灯籠の道路に向かって「聖」



金毘羅燈籠

の字が、また東側には「白」、南側には「八」、西側には「金」の字が刻まれている。それは「聖」は即ち聖の諸天菩神を意味し「八」は八幡神社を「金」はこんぴらさんの方角を示す道標の役目をもつものである。燈籠の南側には、石の階段が付いていて、薄暮になるとお灯明を階段から上がって灯したものだと思われる。

この燈籠は初め近くの塚の上に建っていたのを現在地に移転したものだという。

5 水田尋常高等小学校跡

所在地 (当時) 木田郡山崎村字水田

創立 明治二十年(1887年)四月一日

経緯 明治五年(1872年)の学制

発布により

下田井村の成達小学校

山崎村の米山小学校

元山村の習用小学校

の三校が合併して明治三十一年(1898年)八月この地に水田尋常小学



水田尋常・高等小学校跡碑

校が建設された。その後明治四十一年（1908年）四月に高等科が併置され水田尋常高等小学校と改められた。

敷地面積 当時の敷地面積千八百五十九坪（約五千六百三十平方メートル）

児童生徒数 尋常科 四百八十四名 高等科 百十二名

校 築 移 転 昭和十二年（1937年）八月、現在地の川添村大字山崎字本村へ移転

記念碑建立 平成三年（1991年）四月十二日水田尋常高等小学校創立百周年を記念

して建立された。

主な卒業生 川島 猛氏（彫刻家） 穴吹夏次氏（穴吹工務店元社長）など多数排出し

ている。

【水田尋常小学校跡の碑】

（高松市東山崎町字水田四三四番地三新設高松東道路脇設置）

沿革 明治五年の学制発布により設立されてきた下田井村の成達小学校

山崎村の米山小学校と元山村の習用小学校の三校が明治二十年四月に合併してこの地に水田尋常高等小学校が設立された 明治四十一年四月高等科を併置し水田尋常高等小学校となった。

本校は弟子共に勉学に勤しみ その教育成果は他校に秀で 県下に名声を博し ひとしく

村民の誇りであった。

昭和十二年八月川添村大字山崎字本村へ移転し 昭和十三年四月より川添村立川添尋常高等小学校と改称された。

昭和十二年当時校地面積は一八五九坪 児童生徒数は尋常科四八四名高等科一一二名であった

この碑は 高松市立川添小学校創立百周年記念事業として建立する

平成三年四月吉日 題字 杏邨 安部 一郎

川添小学校創立百周年記念事業実行委員会

6 香伯橋（平家落人伝説の地）

平家一門が都を発って西国を流浪し、一の谷、屋島壇の浦、長門壇の浦と各地の合戦場で戦死、また脱落する者等が続出し、京都を出るとき八千名余の大集団であった平家勢も、滅亡の地で運命を共にした人の数は数百名にすぎなかったという。戦いの場から落ちのびた人達は源氏の追っ手の目から逃れるために山深い奥地に潜りこんで棲み付いたり、途中で行



香 伯 橋

倒れとなったり、漁師や百姓にかくまわれてその妻となつた者などその数は知れない。これにまつわる落人伝説は四国や九州の各地に語り継がれている。元山町香伯集落に伝わる落人伝説は、今から八百十年余の昔、屋島の源平の戦いに敗れ、奥地に逃れるためにこの地に辿り着いた平家の女官、平香伯が、力尽きて一行と別れて隠れ棲み、間もなくその生涯を閉じた。これを憐れに思った里人達がこの地に葬つたという。この女官の名前が語り継がれて地名として残っている（古老の話）。しかし、今ではその墓も塚も定かでない。

吉川英治作新平家物語の一節

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰の理を現す。

奢れる人も久しからず

ただ春の夜の夢の如し。

猛き者も遂には滅びぬ

偏に風の前の塵におなじ。



7 春日川と川市

春日川は、二級河川新川水系の一次支川に属する。延長は十五・二キロメートル、流域面積は六十二・九平方キロメートルである。

すげさわ

高松市東植田町菅沢付近を源流とする六つの支流を集めて木太町の北端の河口に至り瀬戸内海に注ぐ。現在の下流の流路は一定であるが、古来より洪水のたびに流路が変化し海岸線が明確でない低湿地帯であり、災害と防災工事の歴史が繰り返されてき

かんじょう

た。春日川橋の川原から川島本町の間で流れ灌頂の灌頂市が毎年開かれている。
川市と流れ灌頂

孝明天皇の嘉永年間（1848年～1854年）というから150年位昔のことである。

春日川の土手下で子供が遊んでいて、牛の骨を拾った。子供たちはそれを真ん中に置いて、「なんまいだ、なんまいだ」と念仏を唱えて百万遍遊びをしていた。

ところが、その夜子供の親の夢枕に大きな牛が現れて「今日川原で子供たちにありがた

い供養をしてもらった。これで成仏できます」と札を言ったという。



昭和40年頃の川市

驚いた親たちは、翌日高松城下片原町の清光寺の住職にこの話をする、「それは死んだ牛の魂が成仏できずに迷っているのだから流れ灌頂をしたらよい」というので、早速手厚く供養したという。この日が旧四月十八日だったので、それから毎年流れ灌頂をする事になった。これが春日川の流れ灌頂の始まりだという。これは、後日、春日寺の寺島竜昇住職が高松片原町の清光寺せいこうじの先代住職から聞いた話である。

また一説には天正時代のはじめ頃に大洪水で多くの人や家畜の犠牲が出て、その供養のために灌頂市が始められたとも言われている。

春日川の上流川添橋下での元山市（五月二十日）・川久保市（五月二十二日）・川島市（五月二十五日）は春日川川市（五月十八日）と一連のものである。

こうして始まった流れ灌頂は、三年後に清光寺の誼皇ぎこうという住職が、東浜の香具師やしに相談して、農具などを中心にした川市を開くようにしたものといわれている。



春日川の川市

流れ灌頂とは

災害や洪水で非業の死を遂げた人や動物の霊を慰めるため、輪廻解脱（迷いから覚めて成仏させる）のために行う供養（供物をしてお念仏を唱え霊をなぐさめる）のこと。

春日川では、嘉永年間（いまから約百六十年前）頃から行われている。方法は河原に木材で祭壇を作り阿弥陀如来像を祀ってお供物をする。そこで僧侶の読経に合わせて地元の人々が念仏を唱え、経木に戒名を書いたお札を川に流すと死者は成仏できると言う仏教儀礼である。

8 大藪晴彦住居跡

所在地 高松市元山町



元山町を東進すると、春日川に架かる元山橋に出る。その手前百メートルの北側に、福井興業(株)の二階建家が見える。その北側、旧道に面した家がハードボイルド作家・大藪春彦の実家で、昭和三十三年、

早稲田大学在学中の夏、ここで処女作「野獣死すべし」を書き、同人誌に発表した。これが江戸川乱歩により「宝石」に転載され、推理作家の道を歩むことになった。タフで非情な主人公のダイナミックなアクションが中心。かれの代表作に「黒豹の鎮魂歌」（昭和45

（50年）「戦士の挽歌^{バラード}（昭和55（56年）がある。

大藪春彦は、昭和十年二月朝鮮の京城で生まれ、敗戦で祖母のいる善通寺に引き揚げた。父が新制高校の物理教師だったので、父の転勤に伴い小、中学校を転校した。前田村中塚に住み、昭和二十六年三月前田中学校を卒業、木田高校（現県立東高校）へ入学したが、ここでは一学期間だけだった。一家が川添村元山（元山町）に転居したからである。学区制で高松一高に転校した彼は、教室の窓が彼の出入口であり、栗林公園を訪れる修学旅行生と遊んだとか多様な話題がある。

「小説家が住んでいたとは、ほとんど地元では知らなかった。」（付近の人たちの話）くらいで、ただ、木田高校で彼の父に教わった讃岐文学主宰の故永田敏之氏は「同じ地に住んでいてよく会ったが、いつも蒼ざめた顔をしてドストエフスキーなどの本を手に使っていた。」と語っている。従姉の劇作家大藪郁子も木田高校の卒業生である。

大藪の住家は、春日川西堤防に近く、川添橋から北西へ旧長尾街道を約百メートルの地点にあった。今は家屋もなく空き地になったままである。

9 大熊城跡

所在 高松市元山町

高松市元山町には、「中世」の戦国時代の昔、「大熊城」という名の城があったとの言い伝えがある。しかし、今その跡らしいものは見当たらないが単なる伝説とも思われない。ここ、元山町は、倭名抄の記述によれば、すでに「毛止夜万^{もとやま}」という地名で出ている。この地方は、相当早くから拓けた土地らしい。

一、全讃史（高松藩時代の儒学者・中山城山著）によれば、「紀州熊野大権現」（元山村在）天文年間（1550年代）大熊丹後守 清助 祠建立」とある。

大熊丹後守は、紀州熊野の人であるが、讃岐国山田郡本山郷に家臣と共に移り住み、紀州から熊野大権現を勧請して一族の守護神とした。

本山郷は、藩政時代に入ってから元山村となった。

大熊という地名は、その小字^{こあざ}であったようで、今も東大熊、西大熊、北大熊、中大熊に四区分されている。

その位置は、春日川から県道高松く大内線（通称 新長尾街道）の辺りまでの区域を東大熊、これより西の木太町今村境までを西大熊、県道高松く長尾線の両側を中大熊、末宗上、末宗下を北大熊に区分している。この地名は、今も土地台帳に残っている。

二、大熊城跡（根拠）

大熊城跡があった位置については、現在明確に特定できる文献等はない。

古老の話によると、現在の「ことでん元山駅」一帯にあったのではという。その根拠として、元山駅の西百五十メートルの道路地点の県営元山団地入口の川底改修工事中、削岩機の先端が大きな石に突き当たり、不審に思った現場監督が、地元の郷土史家に調べてもらったところ、「確定的なことは言えないが、位置などから見てこれは大熊城の石垣の一部と思われる」という事であった。

また元山駅の東六十メートル位の旧長尾街道沿い東側に「大熊城主大野備前守の屋敷跡」と言われる土地がある。その一角に「若宮さん」という小祠が祀られていたが今は熊野神社境内に移されているという。

熊野神社は大熊城を築いた大熊丹後守清助が紀州熊野三山の一つ熊野本社の神霊を大熊城の鬼門神として奉祀したものといわれることなどから大熊城がこの地にあったことがうかがわれる。

三、桃千代丸伝説と大熊城

甲斐の国主、武田信玄は、信濃平定の余勢をかって京を目指したが、その途上で病に甦れた。その子勝頼の時代守勢に転じたが、織田軍の猛攻にあつて遂に天目山でその子信勝と共に自害した。勝頼には長子信勝の下に異母弟の桃千代丸があった。したがって、桃千代丸は、武田信玄の孫に当たる。

桃千代丸は、その時、まだ幼少のため、信玄の竹馬の友である秩父山中恵林寺の和尚かいせん快川に預けられたが、織田・豊臣氏の追求の手が厳しく、血筋を守るため十七、八名の家臣団に護らせて乳母の地「讃岐」に逃した。

讃岐国山田郡本山郷の大熊城の大熊丹後守弾正を頼った桃千代丸と母蘭溪は城にかくまわれたが、追っ手の追及から逃がすため室山城（栗林公園の借景 紫雲山の南側ピーク一帯）の城主坂田権之丞に預けられた。しかし、ここも安住の地でなくなり、遂に僧職に身を変えて由佐の西光寺に入って祖霊を弔った。西光寺には、今も桃千代丸が礼拝した信玄、勝頼の位牌（模写）があるという。長じて、桃千代丸は久米山に移り、山上に諏訪大明神を祀り社僧としてその生涯を閉じたという。

疾如風 徐如林
掠如火 不动如山

10 熊野神社

所在地 高松市元山町元山下

祭神 スサノオノミコト ケツミコノカミ（家津御子神） 天照大神

大熊城主「大熊丹後守・清助」が勧請して建立したといわれる熊野神社は、大熊城跡の北西約三百メートルに位置し、琴電長尾線の西側約五十メートルに在る。

なお、讃州府記によれば、紀州熊野の住人大熊弾正、天正三年（1575年）九月寄進との記述がある。さらに天正十年（1582年）兵火により焼失。その後、兵乱を経て三谷彦兵衛再興す、とある。

これらを考えると、熊野神社は、大熊丹後守によって建立されたが、その後、兵乱のため焼失。再びもとの位置に再建されたものと思われる。いずれにしても熊野神社は大熊城の守護神として、またその鬼門神として祀られたものであるうか。

現在、熊野神社の東側には、乗馬場跡、また南側には弓の射場があったといわれている。

元山町周辺には熊野姓とか大熊姓が多いが、その先祖は紀州熊野からご神体に付き添ってきた神官や大熊丹後守の家臣などであった人々も多いのではと思われる。